

人っ子一人いない夜の学校。昼間の賑やかさと対照的に不気味な雰囲気が漂う、長い長い廊下を、一人の少女が駆けていた。上履きが廊下を蹴るぱたぱたという音と、噛み殺した荒い呼吸が、静寂に満ちた世界に響き渡る。

「はあっ、はあっ……くっ、はっ……はあっ……」

少女は真っ青な顔で時折背後を振り返り、足を止めることなく長い長い廊下を走り抜ける。

走り疲れたのか、少女の脚の動きが鈍りだす。息を切らして少女が顔を上げると、頭上に、少女が通う「五年三組」のプレートがあった。咄嗟に少女は壁の引き戸を開け、教室の中へと逃げ込み、扉をぴしゃりと閉じた。

少女は教室の正面に据え付けられた教卓の下へと身を滑り込ませると、身体を丸め、ぎゅっと縮こまった。そうしているうちに、廊下の向こう側から、ずるずる、ずるずると、何かが引きずられるような音が聞こえてくる。

「っ……！」

ずるずる、ずるずる……巨大な何かが這い回るような音が近づいてきて、教室の前まで到達する。少女は手を口に当てて呼吸を止め、じっと動かず耐えた。身動き一つ、衣擦れ一つ立てられない。恐怖に心臓が早鐘を打つ。その音すら聞き取られてしまうのではないかと、更なる恐怖を産む。

いったい何に追われているのか。扉の向こうには何が居るのか、少女にもわからない。一体なぜ自分が学校にいるのか。どうして逃げているのか。何もわからない。とにかく捕まってはいけない。逃げなければいけない。その衝動に駆られて、ここまで来た。

「……………！」

肩を抱き、強く掴んで身体の震えを押しとどめる。泣き出しそうになるのを懸命に堪える。教室の外にある気配が、ふっと動いた。ずるずる、ずるずる……今度は音が遠のいていく。ゆっくりゆっくり音が遠のき、小さくなり、そして消えた。

「……っ、はああああああ……」

たっぷり時間をかけてから、少女は口から手を離し、大きく深呼吸をした。どっと疲れが襲い掛かり、身体から力が抜ける。とりあえずの危機は去った。とにかく学校から逃げ出さなければ。

そう思って立ち上がり、狭い教卓の下から抜けようとした。しかし、身体が動かなかった。

「え……？」

何かに引っ張られるようにして、背中が教卓の裏側から離れない。少女は恐る恐る振り向いた。教卓の裏側、鈍色に光るアルミ板から、無数のタコの触手が生え、吸盤を少女の背中に張り付けていた。

「い……いやああああああああああああああっ！」

堰を切ったように少女が絶叫し、泣きながらもがき、暴れる。しかし触手は振り払えず、

後から後から伸びるタコの触手が、ぺたぺたと少女の身体に巻き付き、動きを封じていく。

「誰かつ、助けてっ、ママっ！ ママああアアアッ！ んぶっ！ んんんんんっ！？」

泣き叫ぶ少女の口の中に触手が潜り込み、口を塞ぐ。細い触手が少女の服の隙間から入り込み、素肌に直接吸盤を吸い付けていく。ぺたぺた、ぺたぺた。少女の薄い胸に、腹に、背中に、触手が張り付いていく。吸盤が張り付いた場所がじんじんと熱を持ち、むず痒い感覚が全身に広がる。

「んむうううっ！ んぐううううううううううううううっ！」

未知の感覚と、怪物に身体を弄られている恐怖に、少女が声にならない悲鳴をあげる。触手は少女の脚に巻き付き、大きく広げた。ミニスカートの奥の、色気のない無地の下着が露わになる。触手が、下着の上から少女のぴたりと閉じた割れ目をなぞる。少女は逃げることもできず、ただ悶え苦しみ続けるだけだった。

「んぐっ、ぶっ、んんんっ！ ぶはっ、助けっ、誰かつ、助けてええええええっ！」

僅かに口の触手が剥がれた瞬間、少女は叫んだ。股座を弄る触手が、下着の中へとその身を潜り込ませようとした、その時だった。

「見つけた！ 今助けるっ！」

元気の良い少女の声が、教室中に轟いた。と同時に、暗闇に包まれた教室を、紫色の光が眩く照らす。

「魔法少女夢子！ ここに見参ーーーーー！」

光の中から飛び出したのは、一人の少女。紫と白を基調にしたふりふりの衣服は、日曜朝の子供向けアニメのヒロインのよう。しかし妙に露出が多く、上はノースリーブで、小さくて丸い肩と脇が覗く。柔らかそうなお腹を見せつけるへそ出しミニスカートからは健康的なスパッツが丸見えだ。薄い胸板の上には大きなリボン、細い手の先は白い長手袋に覆われ、手には先端に宝玉の埋め込まれた魔法のステッキを持つ。

丸い顔、丸い目、短い黒髪の、見るからに活発そうな印象を与える少女の名前は夢子。無事な人々を悪しき存在から守るために戦う魔法少女だ。夢子は教室の中をふわふわと飛び回り、助けを求める声の主を探す。

「え！？ どこ？」

「夢子！ あそこよ！ 教卓の裏側！」

夢子の傍らから、まるで妖精のような小さな生き物が飛び出した。夢子と似たり寄ったりの貧相な肉体を、スクール水着のような衣服で覆っている。赤い長髪の間からは二本の角が生え、背中からはコウモリの翼、尻からは先端の尖った尻尾が伸びる。妖精というよりは小悪魔といった様相だ。

「わかった。リリアは下がってて！」

夢子はふわふわと浮かびながら小悪魔少女を背後に隠し、教卓へ向けてステッキの先端を向けた。ステッキに埋め込まれた宝玉が、明るい紫色に輝く。

「ヴァイオレット・フラッシュ！」

夢子が叫び、ステッキからまるでビームのように光が迸る。サーチライトに照らされるように、闇の中から教卓が浮かび上がった。

「ピギャアアアアアアアアアアアッ！」

醜悪な悲鳴が轟き、教卓がぐねぐねと蠢き、形を変え、その正体を現す。それは、巨大なタコの怪物だった。八本どころではない無数の触手をむちゃくちゃに蠢かせ、肉体を焼く紫の輝きに悶え苦しんでいた。

その触手に絡め取られた少女の姿が見えた。恐怖に染まった顔で、タコの怪物と宙に浮かぶ夢子へ交互に視線を向けている。

「遅くなってごめん！ でも、もう大丈夫だから！」

夢子がにっこりと笑う。タコの怪物が激しく叫び、触手を夢子へと伸ばした。

「おっととっ……」

夢子はひらひらと風に吹かれるように空中を舞い、襲い来る触手を躲す。そして、ステッキを大きく振り上げて、おもいきり触手に振り下ろした。

「ヴァイオレット・チャージ！」

ステッキが叩きつけられた箇所から光が膨れ上がり、爆発する。触手はばらばらに弾け飛び、怪物が耳障りな悲鳴を上げた。

夢子は自らに迫りくる触手を次々と薙ぎ払いながら、タコの怪物の懷へと飛び込む。そして、タコ本体へとステッキを突き立て、叫んだ。

「ヴァイオレット・シャイニング・ノヴァアアアアア！」

ステッキの先端に埋め込まれた宝玉から、球体状の光が広がる。その光に焼かれるように、あるいは磨り潰されるようにして、怪物の肉体が光を中心に消滅していった。紫の光が教室を包み込み、そして消えた。怪物の姿は影も形もなく消え去っていた。

「ふう、ちょっと手ごわかった」

夢子は宙に浮いたまま一息ついて、額の汗を腕で拭った。その姿を、怪物に襲われていた少女が目丸くして見上げていた。

「あの、き、君は……？」

「あ、大丈夫でしたか？ もう安全です！ 悪い奴はやっつけました！」

夢子はぱっと笑みを浮かべ、自分よりも年上であろう少女の手を取った。何が何だか分からないといった様子の少女をよそに、夢子は優しく語りかける。

「これは悪い夢だったんです。起きれば全部忘れてますよ。怖いことは忘れて、楽しい夢を見直しましょう！」

夢子の握りしめた手から、暖かな光が漏れる。怪物に纏わりつかれて穢れた少女の身体が、ぽかぽかと清められていく。その心地良さからか、それとも緊張から解き放たれた安堵からか、少女はうとうと船を漕ぎ始め、やがて静かに目を閉じ、横たわった。

「おやすみなさい、よい夢を……」

少女を起こさないよう、夢子は静かに語りかける。その後ろから、小悪魔か妖精のよう

な姿の少女が顔を覗かせる。

「終わったわね、お疲れ様、夢子」

「うん、リリアもお疲れ様」

「私は後ろで見てただけよ。戦ったのは夢子でしょ」

「けど道案内してもらったし」

「はあ、まったくこの子ったら。まあいいわ。速く帰って寝ましょ。疲れを残さないようにね」

「はあい」

そんなやり取りを交わしながら、二人はふわふわと宙に浮き、教室の外へと飛び立つと、ふっとその姿を消した。

暗闇に覆われた教室は静かに消えて行き、そしてその世界は消滅した。

「……ん、んん？」

少女が次に目を覚まして見たものは、見慣れた自室の天井だった。カーテンの隙間から差し込む光が、ぼんやりと室内を照らす。

「夢……？」

何かとても怖い夢を見た気がする。そして、誰かに助けられたような。

「……あっ！ やばっ！ 時間！」

少女は枕元の目覚まし時計に目を止めると、ベッドから跳び上がった。部活の朝練に間に合うかギリギリの時間だった。

「もう！ 何でアラーム鳴らなかったのお！？」

ぶつぶつと文句を言いながら急いで着替え、部屋を出た時にはもう、少女は昨晚の夢のことなどすっかり忘れ去っていたのだった。

「おはようリリア」

『おはよう夢子、よく眠れた？』

「うん、ばっちり！」

『そう、それは良かったわ』

それから少し時間が経った頃、夢子もまた自室で目を覚ましていた。そして、誰もいない室内に向かって話しかける。それに答えたのは、夢子の頭の中だけに響く少女の声。あの妖精のような小悪魔のような少女、リリアだ。

「あの子もちゃんと目が覚めてるかなあ」

『心配ないわよ。これまでだって皆大丈夫だったでしょ』

「うん、そうだね」

夢子はベッドからもぞもぞと降りると、パジャマを脱いで着替え始める。未だ発達途上の、女性用下着すらまだ必要ないほどの平たい身体に、シャツを被せる。

夢子は、魔法少女だ。

いや、そう自認しているだけで、正確には魔法少女とは言えない。だが、他に的確な語彙を持たないため、夢子は自分のことを魔法少女だと思っている。

夢魔と呼ばれる怪物が、人知れずこの世の中に存在している。夢魔はその名の通り夢の中に現れ、夢の中でその夢の主を襲い、生命力を喰らう。生命力を喰われた人は無気力になったり、最悪の場合、夢から覚めることがなくなってしまうという。

夢子もまた、夢魔に襲われ、犯されかけた。だが、すんでのところでもリリアに助けられた。リリアもまた夢魔ではあるが、人と共生するために、生きるのに必要な分の生命力を少しずつ貰うだけの良識派、夢子の言う所の「良い夢魔」だ。

リリアは人を守るために、根こそぎ生命力を喰らい尽くす「悪い夢魔」と戦ってきたが、数多の生命力を喰らってパワーアップした悪い夢魔に対して力不足に陥っていた。

そこで、一際強い生命力と精神力を持つ夢子に自身の力を託した。こうして、夢の中で悪い夢魔と戦う魔法少女、夢子が誕生したのだった。

「それにしても、リリアの身体、元に戻らないね」

『まあ、力全部消耗しちゃったからね。しばらくはこのままかしら』

今でこそリリアは小人サイズの幼児体形だが、かつては豊満な大人の女の身体を持つ、まさしくサキュバスのような姿だった。自らの力の殆どを夢子に譲り渡したために、今のような妖精サイズになってしまったのだ。

『けど今の姿も気に入ってはいるのよ？ 燃費良いから、夢子から貰う生命力も少なくなくて済んでるし』

「ん？ どういうこと？」

『私たち夢魔は人間の生命力を食べて生きてるって言ったでしょ？ 私も同じで、今は契約してる夢子からちょっとずつ生命力を貰って生きてるのよ』

「そうなの？」

『ええ。もちろん、夢子に悪影響が出ないくらい、ちょっとずつよ』

「ふーん……じゃあ、私がもっと生命力をあげれば……」

『夢子の生命力はすごく強いけれど、私が完全に元通りになるまでには全然足りないわね。あんまり吸い取り過ぎて夢子が弱っちゃっても本末転倒だし』

「うーん。じゃあ駄目か……」

着替え終わった夢子は、まるでそこにリリアが浮かんでいるかのように、天井を見上げて呟いた。

『一応、手はあるわ。他の子から生命力を吸い取って回るっていう』

「えー、それって悪い夢魔と同じなんじゃ……」

『勘違いしないで。悪い夢魔が悪いのは、生命力を根こそぎ奪い取って人を衰弱させるか

らよ。ちょっと貰うだけなら問題ないし、私だって夢子と会うまではそうやって生きてきたのよ。夢魔だってご飯は必要なの』

「そっか、そうだよな.....じゃあ、他の子から力を分けてもらう？」

『実はそれも問題があっただけ。今の私は力が弱すぎて、完全に夢子に依存しちゃってるのよ。自分で生命力を吸うことが出来なくて、夢子を経由する必要があるのよね』

「.....つまり？」

『夢子に、他の子から生命力を吸い取ってもらわないといけないってこと』

「えええ？ それって私が、その.....エッチなことをするってこと！？」

夢子はベッドに腰を落とし、顔を真っ赤にする。

『まあそうなるわね。人間が肉体的にも精神的にも一番無防備になるのがエッチの後だし、だからこそ私たち夢魔はエッチな夢を見せてから生命力を貰うわけで.....けど、嫌でしょそんなの。私だって自分のために夢子にそんなことさせられないわよ。今のままでも別に困ってないし』

「まあ、そうかな.....うーん、リアに元気になってほしいんだけど」

『今のままでも十分私は元気よ。けどありがとね、夢子！』

そんなやり取りを交わしている時だった。ドアの向こうから、夢子の母親の声が響いた。

「夢子ー？ 起きてるのー？ 起きてるなら早く朝ごはん食べちゃいなさい！」

「うん、今行くー！」

夢子は元気よく返事をし、ベッドから飛び降りると、勢いよく部屋を飛び出した。

「実は夢子に相談したいことがあるのよ」

学校の教室は休み時間で騒がしかった。男子たちは授業と授業の僅かな隙間にボールを抱えて校庭へと駆けていき、女子はグループに分かれて姦しくお喋りをしている。そして夢子もまた、前の席に座る親友と顔を突き合わせていた。

「相談？ なあに明里ちゃん」

「隣のクラスの瑞樹って子、知ってる？ 髪の毛が長くて、大人しくて、いつも一人で本読んでる子」

明里は触角のように二つに結んだ髪をびよこびよこと揺らし、口を大きく動かしながら言った。

「私、これまで結構同じクラスだったことがあったし、引っ越す前は家も私と同じ棟だったから時々お喋りしてるんだけど、最近変な夢見るんだって」

「え？ 夢！？ どんな！？」

夢、という言葉聞いて、夢子は前のめりになる。明里も顔を突き出し、二人はおでこがくっつきそうなほどまで近づいた。

「何でも、噂になってるみたいな、エッチな夢なんだって……」

「えええ？」

夢子たちはひそひそ声で囁き合う。二人の声は、周囲の喧噪に掻き消されて他の生徒たちには聞こえない。

「ほら、前に私が変な夢見て疲れてた時、夢子に相談したら治ったじゃん？ だから、瑞樹の相談にも乗ってあげてほしいのよ」

かつて明里は悪い夢魔に取り付かれ、悪夢の中で犯され、生命力を奪われかけた。夢子の活躍で最悪の事態は避けられたが、未だ夢魔の恐怖は去ったわけではない。この学校の周辺では今でも悪い夢魔が徘徊している。今では喧噪の戻った教室だが、数日前までは夢魔に生命力を奪われた生徒たちの陰鬱とした空気に満ちていた。夢子の夢魔退治のおかげで少しずつ活気を取り戻してきてはいるが、まだまだ平和には程遠い。

「うん、わかった！ 私に任せて！」

この街の平和は、自分を取り戻してみせる。決意を新たに、夢子は平たい胸をどんと叩いて頷いた。

「こ、こんにちは……瑞樹です……」

瑞樹は明里の言う通りの少女だった。髪は肩まで真っ直ぐに伸び、人見知りなのか、夢子に対して緊張しているように肩を竦ませ、目を伏せている。自己紹介の声も今にも消えそうなほど細い。半面、身体的な発育は夢子たちを超えていた。身体を隠すように組まれた腕に押されて、年の割に大きな胸が更に主張を強くしていた。明里が羨ましそうにそれを見つめる。

「初めまして、夢子です！ よろしくね、瑞樹ちゃん！」

「は、はい」

元気良く挨拶をする夢子に、瑞樹は跳び上がるほど身体を震わせ、素っ頓狂な声を上げる。

「ちょっと夢子、ここ図書室なんだから、大きな声を出さないで」

「ああ、ごめんごめん。でも、他に人いないよ？」

「まあそうだけど、けど図書室では静かにするものなの。騒ぐなんて子供みたいでみっともないわ」

明里は大人ぶって夢子を窘める。夢子は大人しく従った。

夢子たち三人は放課後、図書室に設けられた読書スペースで集まっていた。傾いた太陽の光が優しく差し込み、室内を橙色に染めていた。他に生徒はおらず、当番の図書委員は瑞樹自身であるため、内緒の相談事をするにはもってこいの場所だった。

「それで、その、変な夢を見るって……？」

夢子は声を落として聞いた。瑞樹はまだ夢子に人見知りをしているのか、それとも相談内容の恥ずかしさからか、目を合わせることなく下を向いて答える。

「は、はい……三日くらい前から、毎晩、同じ夢を……」

「どんな夢なの？ エッチなやつって聞いたけど」

恥ずかしげもなくずかずかと踏み込む夢子の脚を明里が小突き、夢子が不思議そうに明里を見る。明里は呆れたような顔で夢子を見て、注意するのも馬鹿馬鹿しいと小さく溜息をついた。

「え、えと、その……」

瑞樹は殆ど真下を向いたまま、ぼそぼそと呟く。長い髪が瑞樹の顔を覆い隠す。夢子たちは静かに言葉の先を待った。

「あ、兄が……兄に、その、私が、エッチなことをする、夢で……」

「お兄さん？」

「瑞樹のお兄さん、高等学校のサッカー部のエースなんだよ」

脇から明里が補足情報を挟む。

「背が高くてスポーツ万能でめちゃくちゃカッコ良くて、女の子に大人気で、お兄さん目当てでマネージャーになった子がたくさんいて、色んな子から告白されてるのに、全部断ってるんだって。それだけサッカーに夢中なんだって、断られてむしろ女の子たちはキャーキャー言ってるみたい」

「明里ちゃん、なんでそんなに詳しいの……？」

「ふふん、団地の情報屋明里様とは私の事よ」

この学校の生徒は殆どが近くの集合住宅に住んでいる。明里は物心付くころから団地中の友人宅を遊び歩き、物怖じしない性格で大人たちにも積極的に話しかけ、大人たちからも可愛がられて色々な話をしてきた。同級生だけでなくその親兄弟まで知り合いだと誇る彼女の情報網は学校一、いや団地一と言える。

「はあ……で、瑞樹ちゃんは、そのカッコいいお兄さんと……？」

「ええ、毎晩夢の中で……エッチなことを……」

「ど、どんな……？」

流石の夢子もやや遠慮気味に尋ねた。今度は明里も窘めることなく、興味深そうに顔を近づける。瑞樹は顔を真っ赤にしながら、それでも答えた。

「お、おちんちんを、手で触ったり……」

「そ、それで……？」

夢子たちはさらに顔を寄せる。

「口で、啜えて、舐めたり……」

「えええ？ 汚いよお」

「ちょっと夢子は黙ってて。で、それから……？」

すっかり興味津々な様子を隠さずに、明里は詰め寄る。

「せ、精液を、飲んだり……」

「えええ？ 不味そう……」



「夢子ってば」

明里が思わず夢子の頭をぽんと叩いた。二人は前のめりになっていた身体を元に戻し、お互いの顔を見合う。

「だってオチンチンから出てくるんでしょお？ 汚いし不味いに決まってるよお。ていうか、それがエッチなことなの？」

「夢子、フェラチオって知らないの？」

「知らなーい」

「はぁー、まったくお子ちゃまなんだから」

明里はわざとらしく掌を上に向けて、やれやれのポーズを取った。夢子は「同い年でしょ」と不服そうな顔をしているが、明里は無視する。

「良い？ 男の人はね、オチンチンを触られたり舐められたりするのが気持ち良いの。女の子だってアソコを触ったり舐められたりすると気持ち良いんだから、同じことよ」

「うーん……やっぱりよくわかんないかな……」

「夢子、あんたはそのままが良いわ」

「なにそれえ」

ぶつぶつと文句を言う夢子を他所に、明里は一人、芝居がかった動きで腕を組んでうんうんと頷く。幼馴染として息の合った漫才を繰り広げる二人を、少し羨ましそうに瑞樹が見つめていた。

「で、話を戻すんだけど、瑞樹ちゃん、夢を見始めてからすごく疲れるとか、身体が重いとか、そういうのがある？」

夢子は空気を切り替えるように、はきはきとした口調で尋ねた。もし夢魔が原因だとしたら、生命力を奪われ、何かしらの体調不良が起きているはずだ。

「いえ……体調のほうは特に変化は……」

しかし瑞樹は、けろっとした顔でそう答えた。夢子と明里は顔を見合わせる。

「ん？ そうなの？ 私の時は朝起きた時にすごいぐったりしたんだけど。汗びっしょりだったし」

と明里が言う。瑞樹は首をかしげながらも、淡々と答える。

「いえ、私は特に。少し疲れてるかな？ くらいで」

「うーん？」

夢子も首を傾げた。もしかしたら夢魔じゃないかもしれない。だとしたら夢子に出来ることは何もない。この場合はどうしたらいいのだろう。夢子は考え、すぐに考えるのをやめた。難しいことは後でリアと一緒に考えればいい。

「まあ、とにかくこの夢子にお任せください！ 瑞樹ちゃんの悩みをたちまち解決してしんぜよう」

「あ、ありがとうございます……」

無い胸を反らして得意満面の夢子に、瑞樹は深々と頭を下げた。しかし、明里は何やら

思案している。

「けどさあ、特に体調に問題ないなら、別に解決しなくていいんじゃない？ 瑞樹もカッコいいお兄さんとエッチするの嫌じゃないんでしょ？」

「え、だって兄妹だよ？ 普通は兄妹でエッチなことはしないんじゃない？」

「愛は障害が多いほど燃えるのよ、夢子」

「ええ……？」

「夢子は一人っ子だから分らないのよ」

「明里ちゃんだって一人っ子じゃん」

得意気に胸を反らす明里を、訝し気に見つめる夢子。一体明里はどこから変な知識を仕入れてくるのだろうかといつも不思議に思う。

二人の漫才を他所に、瑞樹は頬に手を当て、深々と溜息をついた。

「確かに兄は顔は良いですし、優しくしてくれますし、尊敬はしているのですが……異性としてはちょっと……」

「ええ？ そうなの？」

「汗臭いですし、服もその辺に脱ぎ散らかしっぱなしだったり、お弁当箱をいつまでも洗わなかったり……デリカシーに欠けるところもありますし、勉強もできませんし……」

「ふーん、身内から見るとやっぱ違うものね」

「私はもっと、王子様みたいなスマートな方が……」

兄の短所を指折り数える瑞樹が、独り言のようにぼつりと零す。よく聞こえなかった明里が、何の気なしに聞き返した。

「え？ 王子様？」

「はっ、いえ、すいません、忘れてください！」

顔の前で慌てて手を振り誤魔化す瑞樹。最初の頃の緊張はほぐれたようだった。

「ごほん、と、とにかく、そんな感じで……何かわかるでしょうか……？」

話を強引に元に戻し、瑞樹は上目遣いで二人を見た。背は瑞樹が一番高いのだが、背中を丸めているので夢子たちを見上げる形になっている。

夢子は満面の笑みを浮かべ、胸をどんと叩いて言った。

「とにかく、任せてください！ 私が何とかしてみせます！」

『ずいぶん大見得を切ったものね』

「おおみえってなに？」

『デカイ口を叩いたわねってことよ。安請け合いしちゃってまあ』

「うーん、よくわからないけど、なんとかなるんじゃない？」

帰宅後、夕食と風呂を済ませ、宿題を親に見張られながらなんとか終え、後は寝るだけとなった夢子は、自室のベッドの上に座って脚をぱたぱたと揺らしながら、脳内のリリアと言葉を交わしていた。

「どう思う？ リリア」

『うーん、いまいちピンと来ないわねえ。夢魔の影響はあると思うんだけど、聞く限り悪夢っていうほどでもなさそうだし、疲労感もそんなにないんでしょう？』

リリアは夢子と入れ替わるように昼間に休眠しているため、瑞樹の話は夢子からの又聞きとなる。説明の下手な夢子から何とか話の全貌を引き出したリリアは、夢魔としての立場から仮説を立てる。

『悪い夢魔じゃなくて、普通の夢魔がちょっとずつ生命力を吸ってるだけかも。けどそれなら三日続けてってのは妙なのよね。普通は毎回違う人から貰うから。気に入られてるのかしら』

「それなら、その夢魔さんに、違う人のとこいってもらえるようお願いすれば良いのかな」

『うーん、それが一番理想的ではあるのだけれど.....これ以上は、直接見てみないと分からないわね』

「なあんだ、リリアも私とあんまり変わらないじゃん」

『うっさいわねえ。仮説があるのとないのとは全然違うのよ』

夢子はニコニコと空に向かって笑いかける。リリアも言葉とは裏腹に声は楽しげだった。よし、と一息ついて、夢子はベッドに勢いよく転がると、リモコンで部屋の明かりを落とし、布団を頭まで被る。

「考えるより行動あるのみ！　じゃ、おやすみー！」

そう言って目を閉じる、途端に夢子の意識は遠のいていく。ベッドに深く沈みこみ、背中から水に沈んでいくような感覚。そして、その流れは反転し、逆にふわふわと宙を浮くような感覚へと変わる。夢子が目を開けると、そこは自室のベッドの上。夢子の意識は幽体離脱の如く肉体から抜け出していた。

精神体となった夢子の姿は、自身が思い描く魔法少女としての姿へと変わっている。夢魔であるリリアの影響で妙に露出が多いが、夢子は気にしていなかった。

部屋の中で、妖精サイズになったリリアが待っていた。今の夢子には同じ精神体である夢魔の姿が視認できる。一日ぶりに姿を見た友人に対し、夢子は笑いかける。

「おはようリリア！」

「おはよう.....ていうのも変な感じだけど。じゃ、行きましょうか。場所は分かる？」

「うん、部屋番号も教えてもらったよ、同じ団地だからそんなに遠くない」

「オッケー、じゃあ早速行きましょう」

「行きましょう！」

息を合わせ、二人は窓をすり抜けて部屋の外へと飛び出す。街灯に寂しく照らされた灰色の集合団地の隙間を、ピーターパンのように宙を自在に舞いながら飛び回る。精神体である二人はあらゆる障害物を貫通して目的地まで一直線に目指せるが、知らない人の家を素通りするのは気が咎めたため、もっぱら何もない屋外を移動していた。

目的地にはすぐに辿り着いた。明里の時は窓から直接室内に侵入したが、今回は瑞樹の

部屋の構造が分からなかったため、ドア側から入り込む。

「おじゃましーす……」

ドアを透過して顔だけを室内に潜らせながら、小さな声で夢子は声をかける。精神体である夢子の声は普通の人間には聞こえないし、潜入しているのだから聞こえても困るのだが、勝手に部屋に侵入するのは泥棒のようで気が引けたし、一声かけないと何かと落ち着かない。

当然返事が返ってくるはずもないので、夢子はさっさと残りの身体もすり抜けさせ、瑞樹の家に全身を入り込ませた。

「広いわね、四人家族だからこんなもの？」

玄関からは真っ直ぐ廊下が伸び、その両脇に扉が並んでいる。そのいくつかはトイレや風呂場だろう。奥はリビングとキッチンがあり、そこからも別の部屋に繋がっているようだ。

「明里ちゃんと同じ棟から最近引っ越したんだって。前は兄妹で同じ部屋だったって言うてたよ」

「まあ、妹が大きくなってきたら兄と同じ部屋には入れておけないわよね。ご両親の苦勞が偲ばれるわ」

「そういうもののなの？」

「男女を同じ部屋にいさせられないでしょう？」

「けどパパとママは同じ部屋だよ？」

「パパとママは良いのよ」

「なんで？」

「……じゃあ夢子、あなたに兄か弟が居たとして、同じ部屋で暮らしたいと思う？ 着替えとか寝起きの顔とか見られるのよ？」

「えー？ だって兄妹だよ？ 他のクラスの子とかに見られるのはちょっと嫌だけど、家族だったら違わない？ パパに見られても何とも思わないし」

「そこは思いなさいよ。はあ、夢子のことが心配になってきたわ」

本気で言ってそうな夢子に、リリアは深々と息を吐く。夢子はぼかんとした顔で首を傾げていたが、分からないことは分からないで放っておくことにした。難しいことを考えてもしようがない。

「じゃ、瑞樹ちゃんの部屋を探そう」

二人は無重力空間を泳ぐようにふわふわと室内を飛び、片っ端から扉を覗いていく。

一番手前にあった部屋は兄の部屋だった。体操着や制服が雑然と床に積み上がり、教科書も散らばっていて室内は足の踏み場もない。勉強机は全く使われていないようで、雑誌や漫画で埋め尽くされていた。

「典型的な汚部屋ね。汗臭そうだし、これはいくらイケメンでも幻滅だわ」

「瑞樹ちゃんもすっごく悪口言ってた。家だとだらしないって」

リリアと夢子は好き勝手に感想を述べる。その部屋の主は、隅に置かれたベッドの上で静かに寝息を立てていた。

「年頃の男子にしては、この時間帯に寝てるなんて行儀良いじゃない」

「サッカー部の朝練があるからじゃない？」

「なるほどね……ん？」

リリアがふとベッドを振り向く。何か違和感があつた。が、その正体が分からない。

「リリアー？ 次いくよー？」

既に部屋から出ていた夢子が、顔だけをドアから覗かせてリリアを呼んだ。リリアはどこか引っかかりながらも、その正体を掴むまでには至らず、夢子を追って部屋を出た。

廊下を進み、誰も入っていない風呂やトイレを覗き、リビングへと出る。瑞樹の父親らしき男性がソファに深々と腰かけてぼんやりとテレビを見ている後ろを、抜き足差し足で——そもそも浮いているし音は聞こえないはずなのだが——静かに通り抜け、別の扉を抜ける。

「あ、いたいた、瑞樹ちゃんだ」

そこは兄のそれとは違い、綺麗に整理整頓された部屋だった。床にはモノが一つも落ちておらず、通学鞆も所定の位置と思われる籠の中に納まっていた。四方の壁際にはベッド、勉強机、本棚が置かれ、特に大きな本棚が部屋をかなり狭く見せていた。

部屋の主である瑞樹はパジャマ姿だったが起きており、勉強机に向かって熱心に何かの本を読んでいた。部屋の電灯は落とされていたが、勉強机は卓上ランプが煌々と照らしていた。

「夜更かしして読書？ 目に悪いし、不健康だわ。若いうちにちゃんと睡眠をとらないと身体が成長しないわよ」

「リリアってなんだかお母さん見たい」

「夢魔としては人間が健康でいてもらわないと困るもの。食事が不味くなるし」

「ふーん。けど、瑞樹ちゃん、私たちの中では一番背が高いし、身体付きも大人っぽいよ？」

「誤差よ誤差。あなたくらいの年頃なら誕生日が一ヵ月違うだけで成長度合いも段違いでしょ。遺伝とかもあるでしょうけど」

「ふーん、難しいね」

半分くらい理解しないまま、曖昧に夢子は頷き、瑞樹の背後へ近づく。瑞樹は当然二人に気付くことなく、一心不乱にページをめくっていた。

「瑞樹ちゃん、学校でもずっと本読んでるんだって。すごい真面目さんなんだ」

なぜか夢子が得意気に言った。リリアは「ふーん」と曖昧に返事を返し、部屋のあちこちを見て回る。

「へえ、本棚も本でぎっしり……ん？」

天井まで届くのではないかという巨大な本棚を眺めていたリリアが、顔をしかめる。視線を上下左右に向け、ぎっしりと隙間なく詰まった本の背表紙を追う。

「どうしたのリリア？」

「.....あー」

どう答えたものか、逡巡したリリアの脇を、夢子がふわふわと通り過ぎ、本棚に顔を近づけた。

「ええと？ 『乱れた乙女の純情』『蜜の味』『青い果実が熟れる時』.....」

フリガナがふってあるおかげで何とか読める漢字のタイトルを、次々と読み上げていく。中には難しすぎて読めないタイトルもあったが、それを読めないことは夢子にとって良かったのか悪かったのか。

「全部官能小説じゃない！」

我慢ならずリリアが叫んだ。リリアの言う通り、本棚は上から下までぎっしりと官能小説や少し過激な少女漫画、あるいは女性向け雑誌が詰め込まれていた。それ以外だと、参考書や辞典の類が申し訳程度に並んでいるだけだ。

「かんのう.....なに？」

「ちょっぴりエッチな小説ってことよ。この子、まさか学校でもこれを読んでるの？」

地味で真面目な文学少女だと思いきや、とんだマセガキだった。学校の教室で、誰とも交わずに官能小説を読みふけるとは。

「瑞樹ちゃんって、随分なむつつりスケベね.....」

「確かに、エッチな夢のこと話すときも結構ノリノリだったかも」

夢子は顎に指をあてて学校でのことを思い返す。夢について話す時は恥ずかしがってこそいたが、話すことを躊躇っている様子はなかった。夢子と明里があれこれと下ネタを交わしている時も、顔を赤くしながら聞き入っていたような気がする。

「はあー、まったく、最近の子は.....」

リリアは深々と溜息をついた。自慰に夢中になっていた明里といい、官能小説を読み耽る瑞樹といい、どいつもこいつも年の割にませ過ぎている。.....いや、夢子が年の割にお子ちゃま過ぎるだけで、明里や瑞樹くらい性に興味関心を持つ方が自然なのかもしれないが。

「ふう。私の王子様。早く私を迎えに来てください.....」

ぱたんと本を閉じ、室内に夢子たちがいるとも知らず、瑞樹は独り言ちる。静かに立ち上がり、本棚の隙間に読んでいた本を差し込んだ。タイトルは『王子様を買われた奴隷の私』。奴隷、の文字が読めない夢子は首を傾げていたが、リリアは大まかな内容を察して項垂れた。

瑞樹は卓上ランプの明かりを落とすと、もぞもぞとベッドに潜り込む。しばらく寝返りをうっていたが、やがて静かに寝息を立てはじめた。じーっとその様子を眺めていた夢子が、ぴよんと空を跳ねる。

「瑞樹ちゃんが寝たよ。良し、じゃあ早速――」

「ちょっと待って夢子、なんだか変な感じがする」

「え？」

いつものように瑞樹の精神世界へと入り込もうとした夢子を、リリアの鋭い声が制した。夢子は何も感じないが、リリアは視線を部屋のあちこちに向け、警戒心を露わにする。

「何かしら、この感じ……何かが、いる……？」

その瞬間、部屋の片隅の闇の中から、黒い影が広がった。

「ふああ……朝……」

カーテン越しの朝日を浴びて、瑞樹は目を覚ました。ベッドの上で大きく手を上げ、背筋を反らして伸びをする。大きな欠伸を一つして、浮いた涙を腕で拭うと、ベッドを跳び下り、テキパキと着替える。

そしてリビングへ出て、キッチンへ向かう母の背に挨拶をし、洗面台で顔を洗うと、リビングへは戻らず、兄の部屋へと向かう。そして、何のためらいもなくドアノブを回し、散らかり放題の兄の部屋へと入り込む。

「和樹お兄さん、朝ですよ、起きてください」

声をかけても、兄である和樹は間抜け面を晒しながら仰向けで寝たままだ。瑞樹はずかずかと部屋を突っ切り、窓を塞ぐ遮光カーテンを勢いよく開く。鋭い日差しが喰らい部屋を貫き、それを顔面に浴びた和樹は顔をしかめ、掛け布団を顔に覆いかぶせる。布団の下から「うう〜ん」とくぐもった呻き声が聞こえてきた。

「もう、早く起きないと、遅刻しますよ」

出来の悪い兄を叱る、しっかり者の妹。そんな絵に描いたような光景が繰り広げられる。掛け布団を頭上にまで引き上げたせいで、和樹の下腹部が布団からはみ出していた。その一点に、瑞樹の視線が止まる。

「もう、起きないと……いじわるしちゃいますよ？」

言葉とは裏腹に、瑞樹の声は悪戯っぽく弾んでいた。その視線の先には、大きく TENT を張った和樹の下腹部があった。

瑞樹はにこりと笑うと、ベッドに這い上がり、兄の足元に跪いた。そして、ゆっくり、兄のパジャマのズボンを下着ごと引きずり下ろしていく。薄いパジャマ生地を大きく張り上げるソレが傾き、そして、バネが弾けるようにズボンの裾から飛び出した。

「ああ、朝からこんなに大きくして……困ったお兄さんですね」

それは、ギンギンに朝勃ちしたペニスだった。黒々と輝き、皮がずる剥けてピンク色の亀頭が丸々露出した立派な肉棒が、朝日を受けて輝いている。瑞樹はソレに目を奪われるように、うっとりと倒錯した視線を向ける。

もわもわと立ち上る雄の臭いを胸いっぱい吸い込むよう鼻から深々と息を吸い、口からゆっくりと吐き出す。顔は上気し、兄のペニスを前に、年に似合わぬ雌の顔を晒してい

た。

「こんな状態ではリビングに出られません……仕方がないですね、私が鎮めて差し上げます……」

瑞樹はそそり立つ肉棒に顔をぐっと近づける。途端に雄の臭いが濃くなり、瑞樹は甘い吐息を漏らす。まるで犬のようにすんすんと鼻をひくつかせ、鼻の頭をペニスに擦り付ける。そして、小さな唇をすばませ、ピンク色の亀頭の先端にキスをした。

「ちゅっ……ちゅっ、んっ、ちゅ、ちゅ……」

亀頭全体にキスの雨を降らせる。焦らすように、虐めるように、つかず離れずの微妙な距離を保ちながら唇を動かす。瑞樹の動きに合わせて、右に左にペニスが揺れる。瑞樹の小さくてぷにぷにの手が、肉棒を支えて固定した。逃げ場を失くしたペニスに、更にキスをする。

「んちゅ……ふふふ、早く起きないと、このまま妹にイカされてしまいますよ……？」

意地悪っぽい表情を浮かべ、ペニス越しに兄の顔を見上げる。兄の上半身は布団に覆われていたが、その下では目覚めているのか、時折くぐもった呻き声のような、噛み殺した嬌声が聞こえてくる。気持ち良いのを必死に我慢しているようなその声に、瑞樹の気持ちが昂る。

「どこまで我慢できますか？ 和樹お兄さん……はむっ」

と、瑞樹が口を大きく開き、太く大きな和樹のペニスを咥えこんだ。ピンク色の亀頭が丸々口の中に収まり、小さな瑞樹の口の中で、これまた小さな舌に弄ばれる。

「んちゅっ、れろっ、んっ、あむ、れろれろ……ぺろ、じゅるっ、んっ、ふう……」

キャンディーでも舐めるように、口に含んだ亀頭を舌で転がす。尿道をなぞり、カリ首の裏側をくすぐり、鈴口全体を撫でるように舐めあげる。その動きに合わせて、びくん、びくんとペニスが跳ね、腰全体も浮いてくる。瑞樹は全体重をかけて兄の浮き上がる身体を押さえつけながら、執拗に亀頭を責めた。

「じゅっ、じゅるっ！ んっ、れろれろれろ、はむっ、ちゅっ、ちゅる……」

口を窄め、顔を歪めながら激しく吸引し、頬の裏側に擦り付ける。舌の先端で尿道をほじくり回し、舌全体でぞりぞりと亀頭をこねくり回す。少しずつ、口の中にしょっぱい味が広がっていく。

「んふふ……なにか漏れてきましたよ、お兄さん……ちゅっ、んっ……もう限界なんじゃないんですか？ うふふ、観念して、起きてくださいーい、ちゅっ、じゅる……」

挑発的な言葉を挟みながら、唾液をだらだらと纏わりつかせ、ぬらぬらと光る肉棒を愛おしく口で包み込み、奉仕する。布団の中からは押し殺した嬌声が激しさを増し、そして、布団の裾から太く長い腕が二本伸び、瑞樹の頭を抑えつけた。

「んぶっ！？ んんんんんっ！」

その腕ががっしりと瑞樹の頭を固定し、自らの股間にぐっと押し付けた。小さな口の中に肉棒が押し込まれ、それは根本まで突き刺さった。亀頭が喉に押し当てられ、瑞樹は苦



悶の声を上げる。

「んぐっ、んっ……んんんっ！」

兄の身体をばんばんと叩きながら抗議の声を上げる瑞樹。それが通じたのか、瑞樹の頭が持ち上げられ、喉奥からペニスが引き抜かれていく。だが、それが完全に吐き出されようとした瞬間、再び頭が押し付けられ、口の中をペニスが蹂躪する。

「んぶうう！ んっ、んむっ、じゅるっ、じゅぼっ、んっ、んんっ！」

兄の腕は、瑞樹の頭を激しく上下に揺さぶり、暖かな口の中にペニスを出し入れさせた。唾液が掻き混ぜられ、じゅぶじゅぶと汚い水音を立てながら、結合部から溢れだす。ざらざらとした瑞樹の舌の感触を楽しむように、長い長いストロークで、ペニスの裏側を擦り付けながら前後する。喉の奥まで遠慮容赦なく突き上げ、まるでオナホで自慰をするように、瑞樹の口を犯す。

兄を振り払うことも出来ず、されるがままに犯される瑞樹。呼吸も満足にできず、苦しい吐息を漏らす。だが、その顔には悦びも浮かんでいた。激しく犯されながらも、瑞樹は必死に舌をペニスに絡ませ、喉を鳴らし、兄の肉棒に奉仕した。泡立つ唾液を塗り込むように舌をぴちゃぴちゃと蠢かせ、鼻息を荒くしながらペニスを激しく吸引する。

「んぶっ！ んっ、んぐっ！ おっ、おごっ！ んっ、んぶううううううっ！」

和樹が腰を突き上げ、妹の頭をぐりぐりと一際押し付ける。根本まで捻じ込まれたペニスの先端は喉奥に突き刺さり、そして大きくぶると震え、溜め込まれた白濁液を思い切り吐き出した。

どびゅっ、びゅるるるっ、どふんっ……どろりとした精液が喉奥に直接流し込まれ、瑞樹は声も上げられない。だが、それでも喉はごくごく蠢き、必死に兄の子種を飲み干していく。ごくん、ごくん……熱い精液が臓腑に染み込む感覚に、瑞樹は身体を震わせた。たつぷりと時間をかけて精液を吐き出し終えた和樹は、ようやく妹の頭を解放した。瑞樹はずるずると肉棒を口から引き抜きながらも、最後まで唇を肉棒に吸い付けたまま、尿道に残った最後の一滴まで吸い出そうと舌を這わせ続けた。

ちゅぽん、と小気味いい音がして、亀頭が口の中から弾け出た。唾液のアーチが亀頭と瑞樹の口の間に架かる。瑞樹の小さな唇の端から、卵の白身のようにどろりとした半透明の白濁液が垂れ下がっていた。指で摘まめるほどのそれをちゅるりと吸い込むと、瑞樹はくちやくちやと音をたてながらそれを咀嚼し、ゆっくりと飲み込んだ。

「ぐちゅ、ぐちゅ、くちや……んっ、んぐっ……ぶはあっ、はあ……はあ……もう、朝から激しすぎですよ、お兄さん……」

精液臭い息を吐きながら、とろんと崩れた顔で瑞樹は言う。強姦まがいに犯されたにも関わらず、その顔には親愛の情が浮かんでいた。

「ごめんごめん、瑞樹の口があんまりにも気持ち良かったからさ」

と、布団を跳ねのけた和樹が精悍な顔立ちを覗かせ、声変りをすっかり終えた低い声で言った。

「もう、仕方のないおちんちんですね.....ちゅ」

嫌がる素振りも、抗議する様子もなく、瑞樹は少し硬さを失ったペニスにキスをする。唾液と精液でどろどろに汚れた肉棒を丹念に舐め上げ、綺麗にお掃除していく。

「あんまりひどいことすると、もう精液を飲んであげませんか？」

「ええ、それは困るなあ。僕のザーメンは全部瑞樹に注いであげるって決めてるのに」

気色の悪いことを平然と言い放つ和樹。だが、その異常性を咎めるものはここにはいない。瑞樹も、口では兄を非難しつつ、どこかそれを楽しんでいる素振りだった。

「もう、他の女の人に手を出しちゃダメなんですからね。お兄さんのムラムラは、全部私が鎮めてあげますから。んっ、ちゅっ.....はい、綺麗になりましたよ」

最後に尿道に僅かに残った精液を吸い上げて、長い長い口淫は終わった。口元を拭い、ベッドから降りようとする瑞樹の細腕を、兄の大きな手の平が掴んだ。

「もう、まだなんですか？」

「ああ、見ればわかるだろう？」

和樹は己の下腹部に視線を向ける。そこには、お掃除フェラによって元気を取り戻した肉棒が、先と変わらぬ雄々しさのまま天を衝いていた。とても一度射精した後とは思えない。

「もう.....本当に元気なんですから.....」

「それだけが取り柄だからね。どう？」

「遅刻しちゃいますよ？ お母さんに変に思われるかも.....」

「大丈夫だよ、この世界では、僕らを邪魔する人は誰もいないさ.....ずっと、ずっとこうしてられるんだ。ずっと、二人でエッチして過ごすんだ.....」

和樹の顔が、少しずつ狂気に歪んでいく。笑みが引きつり、目が見開かれ、爛々と輝く。その輝きに飲まれるように、瑞樹の顔が蕩けていく。

「うふふ、素敵です。じゃあ、今度は、こっちで.....」

スカートの裾に手を突っ込み、下着をゆっくりと引きずり下ろす。和樹がベッドから降り、自分の背丈の半分くらいしかない瑞樹の肩を、がっしりと掴む。

その時だった。爆音とともに部屋の扉が弾け飛び、何かが部屋に飛び込んできた。

「なっ、なんだっ！」

和樹は咄嗟に瑞樹を庇う。間拔けなことに、丸出しになった股間ではぶらぶらと屹立したペニスが揺れていた。

「やっと入れたっ！ 瑞樹ちゃん！ どこ！？」

「夢子あそこ！ お兄さんも一緒よ！」

闖入者は夢子とリリアであった。二人はすぐに和樹と瑞樹の姿を認めた。「きゃっ！」と夢子が思わず手で顔を覆い、指の隙間から和樹の巨根を凝視した。

「な、なんだお前ら！？」

突然の闖入者に、和樹が驚き、声を荒げる。その語気の荒さに一瞬たじろいだものの、

夢子はすぐに気持ちを切り替え、ぴしっと和樹を指さした。

「あなたが瑞樹ちゃんのお兄さんですね！ 瑞樹ちゃんを離さない！」

「ど、どういう意味だ.....お前らなんなんだ！」

狭い室内で叫び合う二人の間に、リリアの小さな身体が割って入る。

「よく聞きなさい馬鹿兄貴！ アンタは夢魔に寄生されて、欲望を肥大化させられてるのよ！ 実の妹に劣情を抱くほどにね！ それとも前々から妹を犯したかったのかしら？ 夜な夜な妹の夢の中に忍び込んで、自分の都合の良い世界を作り上げて、夢の中で妹を操って奉仕させていたのね！」

リリアの感じていた奇妙な気配の正体はこれだった。最初に和樹の部屋に入り込んだ時にも違和感はあった。実はあの時すでに、和樹の精神は肉体から抜け出て、実の妹である瑞樹の部屋に侵入していたのだ。そして、その後に部屋に侵入してきた夢子たちに気付かれないよう、部屋の片隅でじっとしていた。夢子たちが瑞樹に入り込もうとするのを察知して、先んじて瑞樹の中に入り込み、侵入を妨害していた。

夢魔に寄生されているのは瑞樹ではなく兄の和樹だった。しかし和樹は、夢魔を逆に支配して取り込み、自らが夢魔となって妹の夢の中に侵入していたのだ。

「まさか夢魔を逆に支配するヤツがいるなんて、呆れた生命力と意思の強さね.....年頃の男子にしたって限度があるでしょう。自分の夢に満足していれば良かったものを、わざわざ妹の夢に入り込んで犯すなんて、サイテーの兄貴ね！」

和樹を指さし、激しくリリアが糾弾する。和樹は苦虫を噛み潰したような顔でリリアたちを睨み付ける。

「黙れ！ 妹が、瑞樹が最初に誘ってきたんだ！ 突然俺のベッドに現れて、優しく奉仕してくれたんだ！ 俺は夢中になって瑞樹を犯した！ そしたら、いつの間にか俺の魂は肉体から飛び出していた。家の中を漂っているうちに、瑞樹の寝顔が目に入って.....そんなの我慢できるわけないだろう！」

身体を激しく揺らしながら、和樹が喚き散らす。夢子は「どういうこと？」と小声でリリアに問うた。

「多分、最初のやつは夢魔に見せられた淫夢だったのね。その時に夢魔の力を取り込んで、今の夢子と同じような力を手に入れた。そして今度は妹の夢の中に入り込んで、精神的に支配し、洗脳して、無理やりエッチなことをしていたのよ」

「洗脳なんて出来るの！？」

「夢の中の世界は精神の世界、強く思い描けば何だってできるし、自分の世界を相手に押し付ければ都合の良いように世界を歪めることが出来るわ。最初に瑞樹ちゃんがアンタを誘惑したみたいだね」

「何だとッ、俺が洗脳されていたとでも言うのか！？」

「夢魔がアンタの精神を読み取って、一番性欲を向けている対象の姿を写し取ったのよ。そのほうが効率的に生命力を吸い取れるからね」

夢魔が淫夢を見せるのは、性行為の後が最も無防備な状態になるからだ。魂を無防備にするためには対象に違和感を抱かせず、望み通りの夢を見せることが必要になる。悪夢ではないため対象の消耗も少なく済む。悪い夢魔はそんな小細工をせずに無理やり犯して生命力を削り取るが、リリアのような穏健派の夢魔は基本的に相手の望む夢を見せているのだ。

「ってことはつまり……あのお兄さんは、前からずっと瑞樹ちゃんをエッチな目で見てたってこと？」

「そういうことよ。だからサイテーなの」

軽蔑の色を隠さず、リリアは下半身丸出しの和樹を睨み付ける。夢子もようやく状況を理解し、決意を新たに、魔法のステッキを和樹へと向ける。

「妹を傷つけるお兄さんは許しません！ この魔法少女夢子が成敗します！」

実の妹をエッチな目で見るということの意味はよくわからない。だが、なんであれ実の妹を兄が傷つけて良いはずがない。夢子に兄弟姉妹はいないが、もし自分に妹がいたら絶対に大切に守るはずだ。だから、この兄は許せない。

「ま、魔法少女……」

ステッキに慄いたのか、和樹が狼狽え、頭を抱えて身体を震わせる。口から何やら呻き声が漏れる……が、次第にそれは笑い声へと変わっていく。

「うっ、ううっ、くくっ、ククッ！ や、やったっ、ついにっ、ついにっ！ 本物の魔法少女と会えたぞおおっ！」

恐怖に慄いて震えていたのではない。狂喜に肩を震わせていたのだ。その豹変っぷりに夢子だけでなく、リリアも虚を突かれる。

「な、なに……？」

「しかもロリっ子……最高だ！ そのぺったんこな胸、イカ腹、細い手足、すべすべの肌、小さな身体、顔、口、目……最高過ぎる！ しかもなんだその恰好！ 脇も腹も腿も剥きだしで！ エロ過ぎるだろ！」

和樹はだらだらと涎を垂らしながら、夢子の姿を上から下まで舐めるように眺める。確かに和樹の言う通り、今の夢子の姿は夢魔——サキュバス——であるリリアの影響を強く受け、露出が多いなど性的な要素の強い姿となっている。しかし、それにしたって和樹の態度は異様だった。その答えは一つだ。リリアは悲鳴を上げるように叫んだ。

「こ、こいつロリコンだわっ！ 真正のロリコンよ！」

「ロリコンってなに？」

「小さい女の子をエッチな目で見てる変態ってことよ！ え？ まさか、女子マネからの告白を全部蹴ってたって、そういうこと！？」

「同い年の女には興奮出来ないんだ！ 小っちゃな子を見るとムラムラする！ けどそんな欲望は許されない！ だからスポーツに打ち込んで全てを忘れようとしたのに！ 勘違いした女どもが寄ってきやがってウザいったらなかった！」

近隣に名を轟かせるエースストライカーの残念過ぎる正体に、夢子は驚き、リリアは呆れ果てる。そんな二人には目もくれず、和樹は苦しむように頭を抱えながら、口角泡を飛ばして叫ぶ。

「ずっと頑張って我慢してたのに、瑞樹が、どんどん俺好みに育ってきて、家で俺を迎えるんだ！　ずっとロリとセックスしたかった！　そんなことを思う俺は最悪だ！　最悪の兄貴だ！　けどどうだ、この夢の世界でなら、何をしても自由だ！　なんせ夢の世界なんだからな！」

自分の言葉に陶醉するように、ふらふらと和樹は身体を揺らし、笑みを浮かべる。夢子は困惑し、リリアに視線を向けた。

「もしかして、そんなに悪い人じゃないんじゃない？.....？」

「どうかしら.....まあ、曲がりなりにも我慢してきたわけで、実際に手を出したわけでもなし、性的嗜好は自由よね.....だた、夢魔を取り込んだ影響で欲望が抑えきれなくなってる。このままだと現実世界にも影響を及ぼすわ」

「それじゃ本当の悪い人になっちゃうよ！　どうにかできないの？」

「アイツから夢魔を切り離すことが出来れば元に戻るはず、なんだけど.....」

「普通にやっつけちゃって大丈夫なの？」

「うーん、微妙なところね.....下手に傷つけると現実の兄の肉体や精神にダメージが残りそうだし.....」

「じゃあどうすれば？」

「私も初めてのパターンだから自信ないんだけど、とりあえず死なない程度にボコボコにして、エネルギー切れまで追い込めば夢魔を支配できなくなるかも」

「わかった！　エネルギー切れだね！」

夢子は改めてステッキを構え、和樹に向き直る。

「何をごちゃごちゃ言ってるんだ！　僕と瑞樹の甘々な日々の邪魔をするな！」

和樹が吠え、空気がびりびりと震える。夢子は怯まず、ステッキを天高く掲げて技名を叫ぶ。

「ヴァイオレット・フラ——」

「兄さんを傷つけないで！」

その時、和樹の背後に隠れていた瑞樹が飛びだし、二人の間に割り込んだ。驚いた夢子は咄嗟に攻撃を中断する。その隙に、床を蹴った瑞樹が思いきり夢子に跳びかかり、抱き付くと床に押し倒した。

「み、瑞樹ちゃんっ！　離して！　お兄さんを助けるためなんだよ！」

夢子は瑞樹を振り払おうともがくが、信じられないような力で胴を抱えられ、立ち上がることも出来なかった。

「夢子大丈夫！？　ちょっとアンタ、妹を操って攻撃させるなんて最低よ！」

リリアは和樹を睨み付け、糾弾する。だが、当の和樹は何やら感動したかのように身体

を震わせ、目に涙を浮かべていた。

「違う……俺はそんなこと命じてない……瑞樹が、自分の意思で俺を守ってくれたんだ……なんて兄思いの妹なんだ！　ありがとう瑞樹！　愛しているよ！」

「何言ってるのよ！　そもそもそういう風に暗示をかけたのはアンタでしょう！」

「妹さんを無理やり従わせるのは良くないことです！」

自分勝手な理屈を並べる和樹に、容赦なく罵声を浴びせる。夢子はなんとか絡みつく瑞樹を振りほどき、再び立ち上がりようとしていた。

「うるさいっ！　くくっ、そうだっ！　お前も操ってやる！　ここは俺の夢の中だ！　俺の思い通りになるんだ！　ここでは俺が王なんだ！」

「まずい夢子っ！　一旦退いて——」

「遅いっ！　はあああああああっ！」

和樹が両手を大きく広げ、力いっぱい叫ぶ。その叫びに合わせて、まるで大地震が起きたかのように世界がぐらぐらと揺れ、夢子は立ってられずその場に尻もちをつく。

「うわああああっ！」

世界がぐにやりと歪み、チカチカと視界が眩む。夢子は目を閉じ、耳を塞いだ。それでも何かが頭の中に入ってくる。直接何かに脳味噌に触られているような悪寒に襲われる。遠くからリアの呼ぶ声が聞こえていたが、やがて段々小さくなっていった。

——— 体験版はここまでとなります ———